文化

工芸の力 生活へ

シンポジウム 国画会工芸と沖縄

国展90 芸術の秋

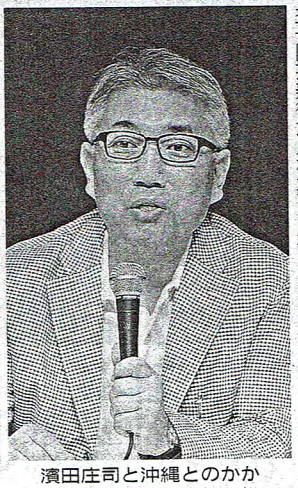
工芸沖縄展 ■下■



濱田庄司や棟方志功らのエピソードを紹介した祝嶺恭子氏



今後の方向性としての新境地開拓の重要性などを訴えた松崎融氏



濱田庄司と沖縄とのかかわりについて報告した横堀聡氏

パネルディスカッションで益子陶芸美術館（栃木）の横堀聡副館長は、益子を拠点に制作し、初の重要無形文化財技術保持者（人間国宝）に指定された濱田庄司が「京都で道を見つけ、英国で始まり、沖縄で学び、益子で育った」と自身の半生を表現する有名なフレーズを紹介した。

濱田が人生初の個展を1923年にロンドンで開催した際、自身のことを「アーティストクラフトマン」と名乗ったことを明かしながら、帰国後に草創期の国画会工芸部会員になったことを説明。「国画会工芸部は作家意識を持っていた人々の集まりで始まった」との見解を示した。

「沖縄では何を学んだのか」と会場に問い掛け、按瓶の共手の成形の仕方や印花文、線彫りなどの技法を列挙。その上で、壺屋の陶工らが作陶の様子を包み隠さず披露したことに濱田が心を打たれた逸話を披露し「優しい、自然な心、健康な暮らしに引かれた」と述べた。また18年に初来県したのを皮切りに、新婚旅行やその後の冬季は毎年のように沖縄で作陶していたことなどに言及した。「濱田を発端に益子の人々は沖縄をとても身近に感じている」と話した。

◆　◆

国画会工芸部鑑査員長で、益子を拠点に制作する木漆工芸作家の松崎融氏は10年前の80回記念国展を益子で開催したことに触れた上で、「僕らの先達と縁の深い沖縄で90回展をどうしても開催したかった」と感慨深げに話した。「100年に向かって何を考えるかが重要だ」と強調。濱田や河井寛次郎、芹沢銈介ら作家を列挙し「先人が切り開いたように新しい焼き物や染め織りを僕らは作っているか非常に疑問だ」と述べ、新境地開拓の重要性と決意を訴えた。

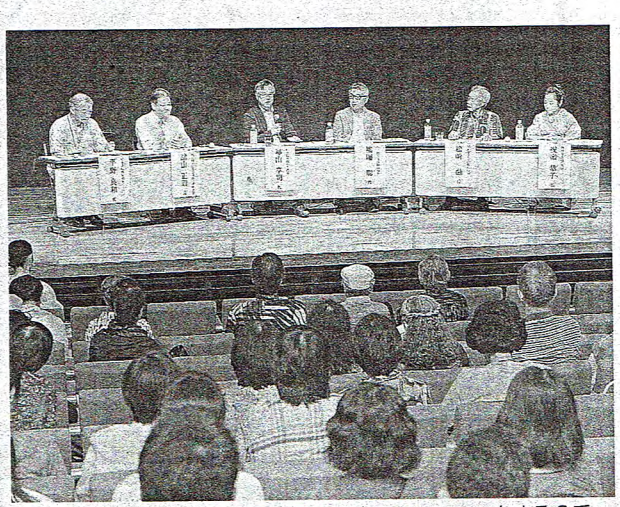
染織家の祝嶺恭子氏は柳悦孝氏らを通して、国展や巨匠らと出会ったエピソードを紹介。図案を思いついても5年間熟成させた芹沢の制作の様子や濱田のステキ好き、近眼の棟方志功が床にはいつくばって制作していた場面などを紹介し、「手の届かないような人々に接することができたのは大変な財産になっている」と話した。

日本民藝館の杉山享司学芸部長は現在の国画会会員の作品について、「ピュアな個性があり、気持ちの中に落ちていくすがすがしさがある。民藝館が持つ美の規範につながっている」との見解を示した上で、「民芸は時代や民族を超える美。狭くとらえず民芸を振り返って創作に生かしてほしい」と呼び掛けた。

司会を務めた益子陶芸美術館前館長で栃木県民藝協会の平野良和会長は、200年前に来琉したバジル・ホールが書いた「朝鮮・琉球航海記」で記された琉球人の衣服についての一節を紹介。

「さまざまな色や模様は特筆に値する」「濃淡さまざまな青が最も普遍的な色である。スコットランドのタータンに似た着物もたくさん見た。子どもたちの着物は大人より派手。帯は豪華な絹の綾織。衣服は極めて優雅で最下層の船頭さえ、絵から抜け出してきたように見えた」と引用した上で、「沖縄の人々は暮らしと染織が一体化していた」と話した。

工芸の展望について、「今こそ工芸が暮らしに恩返しをする番だ」と強調。「暮らしが工芸を育んできたが、時代が変わり、物を慈しむ姿勢、暮らしが危うくなっている。コペルニクス的転回で国画会工芸部が日本の暮らしを変える心意気で取り組んでほしい」と激励した。



「国画会工芸と沖縄」をテーマにディスカッションをする6氏＝25日、那覇市おもろまちの県立博物館・美術館

横堀氏 優しい心学んだ濱田
松崎氏 新境地の開拓を決意
祝嶺氏 巨匠との出会い財産

「国展工芸沖縄展」は県立博物館・美術館で10月2日まで。入場料は一般1200円。小中高校生は500円。問い合わせは沖縄タイムス社文化事業局、電話098（860）3588（平日午前10時～午後6時）